国立国語研究所学術情報リポジトリ

Imperfective aspect in present-day Japanese : a description of the meaning of the shitsutsu-aru form

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2019-03-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 副島, 健作, SOEJIMA, Kensaku
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001998

『日本語科学』4（1998年10月）31-52　〔研究論文〕

現代日本語の不完結相
—シツツアルの意味記述—

副島　健作
（九州大学大学院）

キーワード

アスペクト，一般的意味，もちまえのアスペクチュアリティー，限界動詞と非限界動詞，不完結性

要　旨

従来，シツツアル形式は，「進行」を表す形式とされてきた。しかし，この形式が具体的な文脈の中でどのような意味を表すのか，また，それらの意味の総体としての一般的意味がどのようなものであるのか，という問題に対してはこれまで十分な解答が与えられてはいないように思われる。本稿の目的は，この問題に対して納得のいく解答を提示することにある。

シツツアル形式の基本的意味は，動詞のもちまえのアスペクチュアリティーに基づいていて，限界動詞であれば《変化の不完結》，非限界動詞であれば《動きの開始局面の不完結》を表す。派生的に《くりかえし》も示す。これらの意味は，すべて，動詞の表す変化が限界にむかって推移的に進行している状態を示す《不完結性》という一般的意味からなっている。限界未達成の状態を表すという点で，限界達成後の状態を表すシテイルと対立している。以上のことから，シツツアル形式は，《不完結相》の表現であるといえる。

0．序

現代日本語のアスペクトをどうとらえるかについては，諸氏によって様々な見解がさしだされていて，スルーシテイル（シターシテイタ。以下，スルは「する」及び「した」，シテイルは「している」及び「していた」で代表される動詞の形式を包含する表現として用いる）の対立に関する研究に至っては既にしつくされた観がある。その中で，高橋(1985:9)，工藤(1995:31-33)は，スル「完成相」－シテイル「継続相」を形態論的なカテゴリーとしてのアスペクト形式として認め，従来アスペクト形式とされてきて，寺村(1984)が２次的アスペクトと呼んだ，シテアル，シテシマウ，シテクル，シテイク，シテオク等はそれとは別扱いするという立場をとる。それは主に次の３つの理由による。

i）ほとんどの動詞においてその形式をとり得るわけではない，すなわち，包括性の欠如

ii）主要な意味がアスペクト的意味ではない，あるいは，他の文法的意味と共存

iii）他の２次的アスペクト形式と共起不可能

また，「シテ（「て」フォーム）＋補助動詞」という形態をとらないシツツアル（シツツアッタ。以下，シツツアルは「しつつある」及び「しつつあった」で代表される動詞の形式を包含する表現として用いる）も，工藤(1995:32)では構文的な組立形式として扱われていて，形態論的なカテゴリーとして

のアスペクト形式とは別扱いにされている。

このようなとらえ方は，スルーシテイルという対立を鮮明に浮かび上がらせ，シテイルが「継続のなかの動作」（奥田1977:100）を主要に表す，すなわち《継続性》という抽象的な１つの意味上の要素を備えているということを明らかにする上では非常に有効であったといえる。しかし，その反面，スル，シテイルとそれ以外の形式との体系的連関性については，不明な点を少なからず残しているように思われる。

例えば，シツツアルは，以下の点でシテイルとの類似性が高い形式である[1]。

①他の「シテ＋補助動詞」でアスペクチュアリティーを表す形式において，対立が存在する。（シテクルーシテキツツアル，シテシマウーシテシマイツツアルなど）

②述語の表す事柄の付帯状況を示す動詞の接続形式シツツあるいはシテと，状態（存在）を示す動詞アル，イルとの結合形式である。

③純粋にアスペクト的意味のみを表し，《継続性》をもつ[2]。

このようにシテイルと似たところが多いシツツアルの位置づけは，現代日本語のアスペクト体系を考える上で１つの重要なポイントである。そこで，本稿では，シツツアルが表す意味をシテイル及びスルと比較しながら詳しく検討し，その意味記述を試みる。

１．シツツアルはこれまでどのように研究されてきたか

シツツアルという形は，金田一(1955)，鈴木(1972)，姫野(1982)，森田・松木(1989) らによって，アスペクトの体系に属する１つの形式として扱われていて，一様に，継続動詞はもとより，瞬間動詞であっても，動詞の表す動作（以下，「動作」は，「動き」と「変化」とを含んだ上位概念，いわば event の意で用いる）の「進行」中の状態を表すと記述されている。

とはいえ，鈴木(1972:390)だけは，このシツツアルが，主体に新しい状態，すなわち結果が生じるような動作を表す「結果動詞」の場合，「その動詞のしめす結果にむかって事態がすこしずつ進行している過程にあることをあらわす」として，シツツアルの実現する意味が，動詞のもちまえのアスペクチュアリティー（動詞自体にあらかじめ備わっているアスペクト的意味）が瞬間か継続かの違いとではなく，変化（＝結果）か動き（＝非結果）かの違いと大きく結び付いていることに逸早く気付いていた。鈴木(1972)は述べてはいないが，実際，非限界動詞[3]がシツツアルの形をとる場合には，動作の「進行」過程を表すとはいえない（例文(1)参照）。

その後，金子(1995:395)は，シツツアルは，単純な持続過程の表示として進行過程を表示できない，と述べ，はからずも，シツツアルが単純な《動きの継続》を表さないことを確認して，その一般的意味が〈瞬間的な視点を伴った進行過程〉を示すことにある，としている。これには，参考になる点もあるが，次の２つの文（以下，例文（1b）のように断りがない場合は作例），

（１）　a．汽車はようやく落ち着いたようにゆっくりと走っていました。（銀鉄）

　　b．汽車はようやく落ち着いたようにゆっくりと走りつつありました。

の意味の違い，つまり，「走っている」が完全に走りはじめた後の状態を表し，「走りつつある」がまだ完全に走りはじめていない状態を表すという意味の違いは，〈瞬間的な視点をともなった進

行〉というだけでは説明できない。

最近では，高橋（1996）が，シツツアルが，1）動詞自体がすでにその中に終点を内包している「瞬間動詞」と無条件に共起し「進行」を表す，2）文脈なしでは終点を表すことのできない「継続動詞」において，事態の成立時に終点が設定され，動きとして成立するまでの局面における進行の意「漸次進行」を表す，あるいは，3）その「継続動詞」において，動詞が表す行為の終点を構文的要素で明確化することによって「進行」を表す，ということから〈終点を必ず要求する進行〉を一般的意味として表すと述べている。この論は，基本的には正しく，私も支持したいところである。

しかし，瞬間動詞／継続動詞という分類に基づいて，シツツアルの意味を説明することには問題がある。例えば，

（2） 青書も指摘する通り，国際的な相互依存関係が深まる中で，日本外交の重要度もますます高まりつつある。（読売）

において，「高まる」はある時間内続いて行われる動作を表しているという点で「継続動詞」といえるが，「高まりつつある」は構文的要素による終点の明確化がなくても「進行」を表している。この場合，鈴木(1972)のように，シツツアルは「結果動詞」と結び付いて「進行」を表すと説明すれば，「高まる」は動作の達成によりある結果をもたらす「結果動詞」，すなわち変化達成という限界を内包する限界動詞であるから[4]，「高まりつつある」が「進行」を表すことは自然な帰結として説明できる。要するに，この例は，シツツアルが，動作の時間の長さに関係なく，限界動詞であれば「進行」を表し得ることを示しており，シテイルがそうであったように，瞬間動詞／継続動詞という分類よりも，限界動詞（変化動詞）／非限界動詞（動作動詞）という分類に基づくほうが，シツツアルの意味の実現の仕方はうまく説明できるのである。

実際，高橋(1996)のいう「終点」は限界と同じものだと考えられ，「動詞自体がすでにその中に終点を内包している」（高橋1996:107）瞬間動詞は，限界を内包する限界動詞のことを，また，「文脈なしでは終点を表すことのできない」（高橋1996:107）継続動詞は，限界を内包しない非限界動詞のことを指していて，実質的には，限界動詞／非限界動詞という分類に基づいてシツツアルの意味の実現の仕方を説明しており，継続動詞／瞬間動詞という分類ではいまひとつすっきりした説明ができないことを，はからずも，教えてくれている。

それからもう１つ，これは高橋（1996）に限ったことではないのだが，これまで，《くりかえし》と呼べそうな用法がとりあげられていないし，むしろ，そうした用法は存在しないとする説（姫野1982:374）が，一般的でさえある。しかし，

（3） 北極海に浮かぶ島々では，浸食で島が消失しつつある。（日経）

のような例は，「消失する」という動作が，複数の島による異なる動作のくりかえしの途上にあることを表していて，こうした意味・用法は，《くりかえし》と呼んでよさそうである。

このように，シツツアルを述語としてもつ文に関しては，限界性を軸にしつつ，動詞自体がもつアスペクト的性質とシツツアルが表す意味との関係をよりきめ細かな形でとらえる必要があるにも関わらず，《くりかえし》の用法も含めて，具体・個別的にどういう意味を表すのかについて，

あまり言及されてこなかったし，その意味の総体としての一般的意味がどのようなものであるのか，換言すれば，日本語のアスペクト体系の中でシツツアルはどのような位置を占めるのか，という問題に対しても，これまで十分な解答が与えられてはいない。そこで，本稿では，この問題をシテイル及びスルとの対立という観点を常に頭に置いて検討し，シツツアルの意味のありようを，次のようにとらえて，記述してみることにする。

Ⅰ．基本的意味

①変化の不完結　　——例文（2）

②動きの開始局面の不完結——例文（1b）

Ⅱ．派生的意味

③くりかえし　　——例文（3）

まず，Ⅰの２つの意味は《不完結＝進行》ということでは１つであって何の不完結であるかで対立している。そしてこの違いは動詞のもちまえのアスペクチュアリティーに基づいていて，限界動詞であれば①《変化の不完結》，非限界動詞であれば②《動きの開始局面の不完結》を表す。一方，③の《くりかえし》はより典型的な《変化の不完結》から派生した意である。

なお，「不完結」すなわち「進行」という用語は，「継続」と同義で使われることが多く，混乱も多い。本稿では，基準時（出来事をとらえる時点）において[5]，言語主体が動作の時間的持続だけに注目し，その漸次的な進展は無視するという立場をとったとき「継続」という用語を用い，「進行」を，基準時において「時間の方向性が意識され，時間が進むにつれて，事象がいくつかの局相をたどることを含意している」（山田1984:119）もの，つまり，推移性を含意した継続を示す用語として，区別して論を進めたく思う。

２．変化の不完結

限界動詞は，シツツアルと結び付いて《変化の不完結》を表す。ここでいう限界動詞は，もちろん，ある状態から別の状態への変化を表す動詞，すなわち変化動詞のことであり，限界に達したらある結果の状態を生みだすことから結果動詞とも呼ばれるものである。ただし，自動詞のうち，主体が変化することを表す動詞だけを指すのではなく，他動詞のうち，主体が客体（対象のヲ格で表される名詞）に働きかけ，それを受ける客体に何らかの変化が引き起こされ，結果が生じる主体動き・客体変化動詞も含めている。こうした他動詞の場合，主体の動きの側面も含めて表しているのだから，動作動詞でもあるわけで，従来の変化動詞という言い方は紛らわしい。したがって，両者をひっくるめて，限界動詞ということにする。

限界動詞は，シツツアルと結び付いて，動詞の表す変化の，必然的に成立する点＝新たな結果が生じる点，つまり，限界が未だ達成されていないことを表している。

（4）　a．8時にこの椅子を<u>作った</u>。

　　b．8時にはこの椅子を<u>作りつつあった</u>。

　　c．8時にはこの椅子を<u>作っていた</u>。

（5）　a．(*今）時計が<u>とまる</u>。

b．（今）時計がとまりつつある。

c．（今）時計がとまっている。

スルを用いたaでは，動詞の表す変化を始まりから終わりまでひとまとまりにしてとらえ，その限界が達成されてしまうことを表している。これに対して，シツツアルを用いたbでは，変化の限界は未だ達成されず不完結であることを表している。また，シテイルを用いたcは，変化の限界が達成され，その結果生じた状態を表している。つまり，シツツアル，シテイルは，限界動詞と結び付いた場合，共に，スルが特には表さない《継続性》をもちつつ，限界未達成の不完結な状態を表すか，限界達成後の結果の状態を表すかで，相補的な関係にある。

そのことは，(5) の例で，スル形式が，非過去形（スル）で，発話の瞬間に進行する変化を表し得ないことからもわかる。(5a) は，発話時を表す「今」とは共起できず，動詞の表す変化が未来の出来事として表されている。発話の瞬間に継続する状態は，変化を始まりと終わりの間に割り込んだ不完結な進行過程としてとらえるシツツアルの非過去形を用いるか，変化の結果生じた状態としてとらえるシテイルの非過去形を用いなければ，さし示すことができないのである。

また，限界動詞のシツツアル形式は，「だんだん」，「しだいに」，「じょじょに」，「ますます」，「どんどん」，「ぐんぐん」，「じりじり」，「すこしずつ」，「こくこく」，「ちゃくちゃく」，「ちゃくじつに」，「きゅうそくに」，「ゆるやかに」等の変化の速度あるいは変化の進み具合を規定し，推移性を表す修飾語と共起することが多い（本稿では，これらの副詞が例に現われた場合，下線＿で示す）という大きな特徴がある。

2.1．主体変化動詞

主体の変化を表す動詞のシツツアル形式は，動詞の表す変化が達成されるまでの，不完結な進行過程を表す。この主体変化動詞は，その変化の局面にある程度の時間的幅があり，漸次的に進展する変化を表す動詞（持続性変化動詞）と，その変化の局面が２つの状態の境界線であるような，点的な変化を表す動詞（瞬間性変化動詞）とに下位区分される。時間的幅がある動詞であればシツヅケルでいえ，点的に終わる動詞であれば（「くりかえし」の意以外では）シツヅケルでいえない（森山1986:92）ということで，あるいは，限界動詞は，スル形と「30分で」，「３時間で」，「１週間で」，「2，3日で」，「３年で」等，デのついた期間を表す時間の状況語との共起が示す点が動作の完結点を指すものとされる（中村1997:75）が，その場合，時間の状況語の表す時間の長さが，終結までに要する時間であればそれは持続性の動詞であり（「１年で大人になった」は「大人になる」動作が１年続いたことを含意する），動作開始の瞬間までの所要時間を示せば瞬間性の動詞である（「１時間で頂上に達した」は「頂上に達する」動作の完結点が即ち開始点でもあり，その瞬間までに１時間かかったことを意味する）ということで，これらのタイプは特徴づけられる。

2.1.1．持続性変化動詞

このタイプのシツツアル形式は，動詞の表す変化が，その内的限界にむかって事態がすこしずつ進展して継続していくこと，つまり，進行の状態にあることを表す。これらは，動詞の語彙的

な意味と，それに直結した構文的な特徴によって，次のように分けられる。

(1) 主体の状態変化の不完結

主体そのものの状態の変化，あるいは，その特徴や関係といった側面の変化を表す動詞の場合，その状態変化がすこしずつ進行していることを表す。

（6） もはや三大ネットワークという言葉は“死語”になりつつある。(読売)

（7） にもかかわらず，羽生が実力は一番，の評価はますます固まりつつある。(一局)

（8） 将棋界にとって，いいことかわるいことかは判らぬが，確実に時代は変りつつある。(一局)

（9） この問題はすでに天下の話題となっており，市井すら，
「お上からまたご無理なおふれが出る。寅年うまれの者を兵隊にして朝鮮へつれてゆきなさるそうだ」
というううわさが東京の府下にだけでなく，全国にひろまりつつあった。(歳月)

(10) こうしたNGOに，行政からの補助金がどんどん膨らみつつある。(日経)

(11) 納骨安置所の周辺に合同法要の読経の声がひびき，市民たちの群がりの層がしだいにひろがりつつある。(広島)

(12) スポーツや文化活動などイベントを支えるタイプも徐々に増えつつある。(読売)

(2) 主体の位置変化の不完結

主体が空間的な位置変化をすることを表す動詞の場合，その空間的移動が，すこしずつ進行していることを表す。位置変化の到達点はニ格あるいはへ格，マデ格，起点はカラ格の名詞によって表される。

(13) 私が……捜索班が私に迫りつつあるのを知ったとき……逃げなかったのはそのためです。(沖縄)

(14) 広島への平和行進は近づきつつあり，その到着までにもう六時間しかない。(広島)

(15) ただ，日本上空の強い寒気は東海上に去りつつあり，全国的に冷え込みは緩んでくるという。(日経)

(16) この地区は県庁の近くということもあり，かつては岡山一の夜の繁華街だったが，最近では人の流れが駅のある西の方に移りつつある。(日経)

(17) 米国の利上げで米欧間の金利差が拡大していることを背景に，流出していた資金が米国に戻りつつある。(日経)

次のように抽象的な移動を表すケースもここに含まれる。

(18) ここ数年，大欧州の一員をめざしたロシアは，いまその夢が遠ざかりつつあると感じている。(日経)

(19) 米国，アジアを先導役にした世界景気の拡大は出遅れていた日本，欧州を含めて，「同時好況」に向かいつつある。(日経)

2.1.2. 瞬間性変化動詞

主体変化動詞のうち，「しょうじる」，「しぬ」，「なくなる」等の主体の出現や消滅を表す動詞，「のる」，「はいる」，「はなれる」等の主体の着脱を表す動詞，「さる」，「よぎる」，「こす」等の主体の通過を表す動詞は，やはり状態の変化を表すのであるが，その表す変化の局面は変化前の状態と変化後の状態との境界であって，時間的持続のない，点的，瞬間的な局面である。このタイプのシツツアルの形式は，動詞の表す変化の瞬間的局面を，顕微鏡的にみて持続過程に拡大して，その変化の進行過程を表す。

第１節で述べたように，シツツアルの基本的意味は，動詞の語義がもつ動作の時間の長さは関係なく，限界を内包するか否かといった，限界性の観点から説明されるべきものであるので，限界動詞をさらに持続／瞬間のタイプに分けることは，シツツアル形式の意味記述においてはさほど重要ではないが，シテイルにはないシツツアルの大きな特徴，瞬間的な局面をも進行の姿としてさしだす，ということを強調するため，敢えて区別してとりあげることにする。

（１）主体の出現・消滅の不完結

主体そのものの出現・消滅を表す動詞の場合，主体の出現・消滅，という瞬間的変化をおしひろげて，主体が完全に現われてしまうまでの，あるいは，なくなってしまうまでの，事態がすこしずつ進行していく状態を表す。

(20) かれが世に出たころ，おりからナポレオン三世の勢力が興りつつあった。(歳月)

(21) 今週末の十，十一日はギフト商戦の最大のヤマ場と見られているが，限られた市場への事実上の新規参入だけに，市内百貨店の力関係にも微妙な変化が生じつつある。(日経)

(22) 売上高が前年を下回った企業は依然として多いものの，一段のコスト削減効果が表れつつある。(日経)

(23) 三千代は今死につつあると想像した。(それ)

(24) カキ以外でもアサリ，シジミなどは国内資源が枯渇しつつあり，「原料，消費の両面で限界が見え始めている」(川崎社長)。(日経)

(25) ただし最近はそうしたスタンスも新鮮味がなくなりつつあり，彼女のコラムの評判は以前ほどではなかった。(日経)

動詞が出来事や期間の開始・終了を表す場合もここに含まれる。

(26) 地方と言えば過疎を連想する時代は終わりつつある。(日経)

(27) 一方，これまで医療のウマミを享受してきた業界にも地殻変動が起きつつある。(日経)

(28) 有力地場企業の間では，“熊本離れ”の現象さえ起きつつある。(日経)

（２）主体の着脱の不完結

主体の他の物への付着，他の物からの離脱を表す動詞の場合，主体がくっつく，あるいは離れるという瞬間的変化をおしひろげて，主体が完全にくっついてしまうまでの，あるいは，離れてしまうまでの，事態がすこしずつ進行していく状態を表す。

付着場所はニ格，離脱の起点はカラ格で表される。

(29) 中国向けの完成車輸出が好調なほか，現地生産も軌道に乗りつつあるため，アフターサービス体制を強化する。(日経)

(30) プリマの越智久美子は，国際的にも高く評価されるだけあって，ジゼル役を高度な技法と品格のある踊りとともに，情感豊かな表現など円熟の域に達しつつある。(日経)

(31) 航空業界は今，内外を問わず，かつてない激しい競争時代に入りつつある。(読売)

(32) 日本経済は複合不況論の呪縛から抜け出しつつある。(日経)

(33) すでに岩倉・大久保政権は，都下の人気から離れつつある—そういう種類の情報は，毎月数度，東京から鹿児島へ入っていた。(歳月)

(34) 今回の不況からはようやく脱しつつあるが，金融，財政政策が有効だったから回復に向かっているとは言えない。(日経)

(3) 主体の通過の不完結

主体の空間的な位置変化を表す動詞は，空間を示すヲ格と組み合わさって，そこを通過することを表す。ヲ格で表される名詞は，主体が移動する所，通過する所，離れる所等を表すが，一様に，点的にとらえられていて，これらの動詞のシツツアル形式は，その点的空間の通過という瞬間的変化をおしひろげて，主体が完全に通過してしまうまでの，事態がすこしずつ進行していく状態を表す。

(35) 飛行機は翼に赤と青の標識をつけて，軒傍の空を去りつつあった。(野火)

(36) 歩兵の隊列は，いま子供らの横手を過りつつあった。(楡家)

(37) 天気相談所によると，東日本の寒さは峠を越しつつあり，明日十七日後半からは天気も西の方から崩れてくるという。(日経)

(37)の例は，実際に空間的な通過が起こっているわけではなく，抽象的なものを主体とする一種の比喩表現である。

通過する空間を表すヲ格が，時間，あるいは状況を表すこともある。

(38) 雇用情勢は最悪期を脱しつつある。(日経)

(39) 信用取引の高値期日接近に伴う売りはピークを超えつつあるが，依然売り圧力は強い。(日経)

「すぎる」という動詞が時間上の通過を表す場合，主体＝通過時間となり，ヲ格の名詞が現われないことがある。

(40) 真夜はすぎつつあり，それはその翌日，というよりすでに当日であったであろうが，…… (沖縄)

(41) それから4シーズンが過ぎつつある。(日経)

2.2. 主体動き・客体変化動詞

変化が主体のものではなく，客体のものである動詞がある。その場合，主体は客体に何らかのやり方で働きかけ，それを受ける客体には，何らかの変化が引き起こされ，結果が生じる。このタイプの動詞の表す動作は，シツツアルの形式で，客体の変化の達成にむかって，すなわち，限

界にむかって，主体の動きがすこしずつ進展し，それに合わせて客体も変化していくことを表す。主体の動きを表すという特徴からいえば動作動詞といえなくもないが，動詞自体が既にその中に限界を内包しており，実際，シツツアル形式において客体の《変化の不完結》を表す。

上述の主体変化動詞が，自動詞のカテゴリーの一部であるとするならば，主体動き・客体変化動詞は，他動詞のカテゴリーの一部としてそれに対応しているのだが，主体の動きの側面が含意されるため，その事態は瞬間的では決してあり得ない。こうして，これらは，動詞の語彙的な意味とそれに直結した構文的な特徴によって，次のように分けられる。

2.2.1. 客体の状態変化の不完結

主体が働きかけて，客体に，状態，あるいは，その特徴や関係といった側面の変化が引き起こされることを表す動詞の場合，客体を状態変化させてしまうまでの，主体の動きがすこしずつ進行していることを表す。

(42) 一方，江藤新平も江戸城内にあって，新しい民政方と会計方の機関を整備しつつあった。(歳月)

(43) 一部の不法集団だけのものだった短銃は，じわじわと拡散し，市民社会をむしばみつつある。(日経)

(44) 欣也は外界へ好奇心の目を開きつつあるが，マリーとも離れがたいという葛藤のただ中にある。(日経)

(45) アメリカンスポーツは，国内にとどまらず，海外にその舞台を広げつつある。(読売)

以下の例では，主体は，客体が変化するという事態を所有するものを示しているのみであって，主体が客体に働きかけているとはいいにくいところがある。このような，主体動き・客体変化動詞を述語としてもつ文のうち，「状態変化主体の他動詞文」(天野1987) と呼ばれる，主体と客体とが全体・部分の関係にあるタイプのものは，客体の状態変化がすこしずつ進行していて，その事態が主体にあることを表す。

(46) さらに，米国生まれのインターネットは，政治的にもいまや国際的な情報インフラ（社会的生産基盤）としての地位を着々と固めつつある。(日経)

(47) 中国企業の上場が増える半面，有力英国系財閥が撤退することで，香港市場は「中国の窓口」的な色彩を強めつつある。(日経)

(48) 日銀は今のところ「景気回復の足取りは徐々に確かさを増しつつある」との認識を変えていない。(日経)

2.2.2. 客体の位置変化の不完結

主体が働きかけて，客体に位置の変化が引き起こされることを表す動詞の場合，客体を位置変化させてしまうまでの，主体の動きがすこしずつ進行していることを表す。これらの動詞の表す位置変化には，空間的な，客体の移し変え，取り付け・取り外しから，抽象的な，所有権の移動まで，様々であるが，到達点がニ格あるいはヘ格，マデ格，起点がカラ格の名詞によって表され

ることがあるという点で，共通している。

(1) 客体の空間的な位置変化の不完結

(49) 中国ですらコストの高い広東省から他の地域に生産を移しつつある。(日経)

(50) 日本の合板各社も安値の小径木や競合するパプアニューギニア（PNG）産に引き合いを戻しつつあり，需給緩和感は解消している。(日経)

(2) 客体の取り付け・取り外しの不完結

(51) それに連動する形で，橋本は策定中の長期計画の中にアジア戦略の強化を盛り込みつつある。(日経)

(52) アンゴラ政府と反政府ゲリラのアンゴラ全面独立民族同盟（UNITA）は，一九七五年以来の内戦に終止符を打ちつつある。(日経)

(53) それにくらべれば信長は条件のちがいがあるとはいえ，すでに日本の中央において十ヵ国内外を切りとりつつある。(国盗)

(3) 客体の所有権移動の不完結

「やる」，「もらう」，「わたす」，「かう」，「かえす」，「うばう」等の，いわゆるやりもらいを表す動詞は，客体の所有権を移動させることを表し，客体の所有権を相手から主体に，あるいは，主体から相手に移動させてしまうまでの，主体の動きがすこしずつ進行していることを表す。

(54) 国内市場の一部では，国産品が日本製品など輸入品のシェアを奪いつつあり，「中国ブランド」のカラーテレビを将来の輸出製品の柱としたい考えだ[6]。(日経)

次のような例も客体の所有権の移動の例と考えることができよう。

(55) 環境保全のために日米欧はどのような経済的な仕組み（経済的措置）を導入しつつあるのだろうか。(日経)

(56) 中世以来の古い家並を誇ったこの町は，戦災で市街の八十%が焼失したが，宮殿や寺院などの歴史的建物を地道な努力で修復し，美しい景観を取り戻しつつある。(日経)

(57) 彼らはハード面のことだけでなく，開館後の運営についてもノウハウや研究を蓄積しつつある。(日経)

2.2.3. 客体の出現・消滅の不完結

客体の出現・消滅を表す動詞の場合，客体であるヲ格の名詞が表すものは，ある活動の結果，作りだされる，あるいは，失われる物や状態である。したがって，そのシツツアル形式は，客体が完全に作りだされてしまうまでの，あるいは，なくなってしまうまでの，主体の動きの推移的な進行過程を表す。

(58) JCBは九三年以降，韓国，台湾でカードの現地発行を開始するなど，アジアでの基盤を築きつつある。(日経)

(59) 日米は「アメリッポン」とも呼ぶべき経済社会共同体を形成しつつある。(日経)

(60) 日本石油がマレーシアで液化天然ガス（LNG）事業に邁進し，三菱石油がベトナム沖で有望な油田を発見するなど，ライバル会社は新たな収益源を見いだしつつある。(日経)

(61)　その結果，新聞の将棋欄は徐々に人気を失いつつある。(将棋)

(62)　需要は低迷しているものの，「低価格品は市場から姿を消しつつある」(専門商社) という。(日経)

ヲ格で表される名詞が出来事や期間を示し，動詞がその開始・終了を表す場合もここに含む。

(63)　ずさんな核管理は核汚染の脅威を助長するのみならず，核物質の非合法流出という新たな問題も引き起こしつつある。(日経)

(64)　十四日，北オセチアのウラジカフカスで開かれていた和平交渉が決裂した後，ロシアのエゴロフ副首相（民族問題担当）は，「ロシア軍は首都（グロズヌイ）から十一十五キロの距離で封鎖を完了しつつある」と述べ，グロズヌイを包囲し，進攻準備が整ったことを明らかにした。(日経)

(65)　大蔵省は (1) 国の助成はもともと都道府県による助成を誘導・促進する狙いで始めたもので，役割を終えつつある (2) 都道府県が認可・監督権限をもつ以上，助成も全額負担するのが筋だ一と主張。(日経)

3．動きの開始局面の不完結

非限界動詞は，シツツアルと結び付いて《動きの開始局面の不完結》を表す。ここでいう非限界動詞は，動詞の表す動作が動きを表す動詞であり，動作動詞とも呼ばれる。

ただし，動作動詞＝主体の動きを表す動詞と規定するなら，前に述べた主体動き・客体変化動詞も，主体の動き的側面を客体の変化を表すと同時に表しており，動作動詞ともいえるのだが，シツツアルで《変化の不完結》を表すということでは，ここで取り扱う動詞タイプとは区別する必要がある。

両者は，動詞の表す動作が必然的に成立する点，つまり限界があるか，ないかに，大きな違いが見られる。既に述べたように，主体動き・客体変化動詞は，動詞の表す動作に限界があり，客体に新たな結果が生じた時点でその動作は成立する。それとは対照的に，これから取り扱う主体動き動詞あるいは主体動き・客体非変化動詞は，動詞の表す動作に限界がなく，動きが終わっても，主体あるいは客体に何の結果も生じず，もとの姿のままである。

つまり，ここでいう動作動詞のもつ動き的側面とは，動詞の表す動作が終わり，結果が生じるような到達点，つまり限界のない，非限界的な動作のことである。したがって，上述した誤解を招かないためにも，動作動詞ではなく，非限界動詞という用語を用いることにする。

金子(1995)は，この非限界動詞のシツツアル形式が，長い時間帯指示（「一時間も」，「しばらく」，「何時間も」などの状況語）とは整合しない，として，次のような文は動作の継続過程を表す文としては許容されないとする。

(66)　a．*一時間も待ちつつあった。

b．*その音はしばらくきこえつつあった。

c．*何時間もかれは走りつつあった。

d．*鐘がしばらく鳴りつつあった。　　(金子1995)

このように，この場合のシツツアルが示す意は，シテイルが《動きの継続》を表すというのとは異なるのである。

基本的に，非限界動詞のシツツアル形式は《動きの開始局面の不完結》を表す。

(67) a．太郎は花子をなぐった。
b．太郎は花子をなぐりつつあった。
c．太郎は花子をなぐっていた。

(68) a．その選手はトラック上ではしる。
b．その選手はトラック上ではしりつつある。
c．その選手はトラック上ではしっている。

aのスル形式の場合，動詞の表す動きそのものを，ただ，動的なものとして名指しているだけであるのに対して，cのシテイルの形式は，動きが継続中であることを示している。ところが，bのシツツアルの形式では，主体はまだ完全な動きの状態にはない。動きの開始の局面をとらえ，その局面が未だ達成されず進行中であることを表している。継続中の動きは，動きの開始局面の結果の状態ともとらえられることを考えると，シツツアル，シテイルは，非限界動詞と結び付いた場合，共に，スルが特には表さない《継続性》をもちつつ，開始に至るまでの過程の不完結な状態を表すか，開始の結果生じた状態である動きの継続を表すかで，相補的な関係にある。

とはいうものの，この《動きの開始局面の不完結》という意が，限界動詞が実現する《変化の不完結》の意とかけ離れているわけではない。両者はやはり，《不完結＝進行》を表しているという点では共通している。

限界動詞の場合，動詞が内包する限界とは，動詞が表す変化の達成点，すなわち変化という状況の成立点であるが，非限界動詞の場合，状況の成立点にあたるのは動きの開始点である。そして，非限界動詞のシツツアル形式が《動きの開始局面の不完結》を表すのも，非限界動詞における「動き開始の局面」と限界動詞における「変化達成の局面」とが平行的な関係にあるものとしてとらえられているということである。

動きの開始局面は瞬間的な局面であるので，その不完結を表す非限界動詞のシツツアルの形式が長い時間帯指示とは整合しないのは当然であるといえよう。

3.1．主体動き動詞

主体の動きだけを表す動詞のシツツアル形式は，動きの開始局面の進行過程を表す。

(69) 吉川も興経の後見で家中は少々揉めつつある。(毛利)

(70) 景気回復の兆しが見えつつあるが，消費者の購買意欲は依然盛り上がりに欠けている。(日経)

(71) その時，列車は，ゆっくりと走りつつあった。(高橋1996)

(72) 鴨が池で泳ぎつつあった。(高橋1996)

3.2. 主体動き・客体非変化動詞

主体の働きかけを受ける客体に何の変化も引き起こされず，したがって，結果も生じずに，主体の動きだけを表す動詞がある。このタイプの動詞のシツツアル形式も，やはり，主体の開始局面の進行過程を表す。

(73) 半世紀という月日はお互いの関係を変え，世界の中の両国の位置付けも動かしつつある。(日経)

(74) 文部省は生涯学習時代に対応する学校教育の改革を実施しつつある。(日経)

(75) その一方で低価格化が進み，ソフトメーカーや小売の経営を圧迫しつつある。(日経)

(76) 「それをなにごとか佐賀藩のみはことさらに傍観し，この風雲のなかでいささかの手傷も負わず，いたずらに富強武備を誇りつつあること，その体を見て魚夫の利をねらうものはそれ佐賀藩か，という評判は都の児女ですらうわさしておりまする」(歳月)

(77) 永田町がこれほど劇的な動きを見せつつあるのに，世の中の人々のこの白けた空気はいったい，どういうわけだろうか。(日経)

3.3. 心的動き動詞

「かんじる」，「おもう」，「おどろく」，「しんじる」等の，主体の心的活動を表す動詞の場合[7]，動詞の表している動作は主体の心的な動きである。したがって，シツツアル形式で，主体の心的動きの開始局面が進行していることを表す。

(78) そういうものを含んだ西郷の政治像に対しては，大久保も，かつての大村益次郎とおなじ恐怖を感じつつあり，ゆくゆくはこの私政府を除かなければ太政官政府は成立しがたいとおもうようになっていた。(歳月)

(79) しかし，実際は，イスラエルがPLO（パレスチナ解放機構）との暫定自治合意，ヨルダンとの平和条約締結で，「中東全体の勢いが和平に向かっている」(ペレス外相）と確信しつつあることを物語っているともいえそうだ。(日経)

4．非限界動詞のシツツアルが変化の不完結を表す場合

非限界動詞のシツツアル形式であっても，コンテクストや他の構文的要素によって外的に限界を設けるという条件があれば，変化の不完結を表し得る。限界をもたされた時点で，非限界動詞の表す動作は限界的な動作へと移行するのである。

逆に，限界動詞のシツツアルが《動きの開始局面の不完結》を表すケースは見られない。主体の動き的側面を含んでいる主体動き・客体変化動詞でさえ《変化の不完結》しか表さないのである。つまり，シツツアルは，変化の達成点としての限界が想定できる場合は常に《変化の不完結》を表し，その意味で《変化の不完結》がシツツアルのより典型的な意味であるといえる。

《変化の不完結》は，当然，変化の局面をとりたてなければならない。したがって，動詞の語義自体が変化を表している限界動詞は，無条件に変化の不完結を表す。また，非限界動詞の場合も，外的な限界を設け，限界動詞として振る舞える場合は，もはや《動きの開始局面の不完結》は表

すことはできず，《変化の不完結》しか表さない。結局，シツツアル形式が《動きの開始局面の不完結》を表すのは，非限界動詞に外的な限界づけがなく，開始局面を変化としてとりたてる他仕方がない，という場合だけなのである。

4.1. 量的規定

非限界動詞でも，主体の行う動きの量が，動きの目的を明示，あるいは，客体を特定化してその量を明示することによって規定された場合，動きというよりも動きの量的変化の側面が前面に押しだされ，規定された量の限界にむかって，主体の動きが進行していることを表す。

(80) 中年の女は，息子のセーターを編むために，日だまりで編み棒を動かしつつあった。(高橋1996)

(81) 今年度いっぱいで研究生を卒業する於保さんら三，四人のメンバーは来春にも，初めてのグループ展を開くため名古屋市内のギャラリーと交渉しつつあるところだ。(日経)

(82) それは小説のためのメモで，かれが登場し，彼女（彼女は小説を書きつつある）とともにこのホテルにいて，数時間の小説的時間が流れたところで突然中断している。(聖少)

(83) 彼は先生から紹介していただいた本を読みつつあった。(高橋1996)

(82)は，「小説を書く」が生産行為を表し，「小説」が文脈上，特定化されたもので，またそれは結果的に生みだされるものであり，小説の完成時点が限界ということになる。それから，(83)の「本を読む」が限界性を帯びるのは，「本」が「先生から紹介していただいた」特定のものを指し，一定の量的限界をもったものだからである。

4.2. 空間的規定

主体動き動詞の「あるく」，「はしる」，「とぶ」，「はう」，「およぐ」，「うごく」等の動詞，あるいは，主体動き，客体非変化動詞の「うごかす」，「とばす」，「ながす」，「ころがす」といった，空間的移動をその語彙的意味に含みこんでいる動詞の場合，場所を表すニ格，へ格あるいはマデ格やニムカッテ，ヘトなどによって目的地，目標が明示されることにより，位置変化の限界が設定される。その結果，シツツアル形式は，主体の空間的移動がその限界にむかって進行中であることを表す。

(84) 列車は，故郷へと走りつつある。(高橋1996)

(85) 鴨が向こう岸に向かって泳ぎつつあった。(高橋1996)

(86) 同じ星が，同じ天体の位置をしめて，同じ方向へ動きつつあったのだが，彼がこの稜線に仰ぎ見た星は，彼のいままで見ていた星とは違っていた。(孤高)

(87) ……，かれの兄のひとりは沖縄戦の死者なのであるが，およそワシントンと東京の政府は，この意味合いでそうした死者をつぐなうとはまさに逆の方向に，歯どめのとれた恐ろしい車を転がしつつあるのであり，…… (沖縄)

また，これらの動詞は，空間を表すヲ格をとることによって，空間上の通過の側面が全面に押しだされ，シツツアル形式は通過完了までの進行過程にあることを表す。

(88)　砂に埋もれた木辺の上を一匹の虫が這いつつあった。(高橋1996)

(89)　ロシアも，民主化と市場経済を軸とした改革路線を歩みつつある。(読売)

5．複数の変化のくりかえし

シツツアルには，従来「反復」の用法はないといわれてきた（姫野1982:374)。しかし，複数の変化のくりかえしを表す用法が，実は存在する。変化するものが複数であり，それを窺わせる表現がどこかにあればこの意味が実現される。

(90)　a．その頃，村人達は，食料不足のために死んだ。

b．その頃，村人達は，食料不足のためにどんどん死につつあった。

c．その頃，村人達は，食料不足のためにたびたび死んでいた。

(91)　a．彼は，膨大な資料を読む。

b．彼はこの2，3日，膨大な資料を読みつつある。

c．彼はいつも，膨大な資料を読んでいる。

aのスル形式の場合，動詞の表す，複数の変化の1つ1つがすべて達成されており，それをひとまとまりにして表している。それと比べると，bのシツツアル形式は，(90) では，「その頃」という基準時においては，村人達のあるものは既に死んでいるが，別のものは「死ぬ」という変化活動をまだ行ってすらいないことを表し，(91) では，彼が「この2，3日」という基準時において，ある資料は既に読んでしまっているが，まだ全然読んでいない資料もあることを表していて，シツツアルが，複数の一連の変化が全体としてはまだ未完結であることを表していることがわかる。一連の複数の動作すべてが完結する時点が限界として設定され，シツツアルはその限界への推移過程にあることを表すのである。cのシテイルの場合も同様に，くりかえされる動作を表しているが，限界にむかっての推移という意はない。そのため，限界づけられないくりかえし，すなわち習慣の意をうむ「『よく，時々，たびたび，しばしば，しょっちゅう，たまに』のような頻度を示す形式，『毎日，毎朝，1週間に1度，3日おきに，3日ごとに』『いつも，いつでも，常に』などの形式」(工藤1982:77) は，シテイルとのみ共起可能である。

シツツアルの《くりかえし》の意は，基本的意味の場合と違って，変化自体のくりかえしを問題としていて，動詞の表す動作の個々が「死につつある」，「読みつつある」という変化の進行状態にあって，それらがくりかえされることを表しているのではなく，それぞれが完結した「死ぬ」あるいは「読む」という動作のくりかえしが問題にされている。それゆえ，動詞の語彙的なタイプに左右されない，コンテクストあるいは構文的な条件づけに依存した派生的用法といえる。

もちろん，スルでも，「次々と死んだ」のように反復を表す副詞等の構文的要素がある場合やコンテクストにより，複数の動作がくりかえされることを表し得る。しかし，シツツアルが動作の始まりから終わりにいたる推移の過程に注目するのに対し，スルの反復は推移過程には注目しないがゆえに，複数の一連の動作全体が限界に達したということが強調される。こうして，スルとシツツアルは，限界が達成されたか否かという点で意味的な対立を見せるわけである。

(92)　時の流れに対する身変わりの早さをみせて，それまで日和見していた安芸の小豪族や

周防の大内氏旧臣が次々と戦列に加わりつつある。(毛時)

(93) 江藤の身辺にも，わずかな人数ながらもそういう若い佐賀人が取り巻きつつあった。(歳月)

(94) 戦後生まれにはなじみのない芸能が，若い聴衆を獲得しつつある。(日経)

(92) のように，「つぎつぎと」，「どんどん」等，くりかえしの意をうむ状況語と共起する場合，(93) の「とりまく」のように，動詞自体が複数主体を要求するものである場合，それから，(94) のように，主体ではなく客体が複数である場合，この《くりかえし》の意ははっきりと現れる。そうでないような以下の例は，《くりかえし》の解釈がもちろん可能であるが，その他に，複数主体を１つの集合体ととらえ，不完結な動作がその集合体について起こる，という解釈もまた可能である。

(95) こうした行政，企業，市民の三つのセクターが連携することの有用性については，一昨年の阪神・淡路大震災の救援活動や，今年の「重油ボランティア」，あるいは高齢者のケアなど身近な活動を目の当たりにして，多くの人々が気づきつつある。(読売)

(96) 客がファッションについて学び，成熟しつつある。(日経)

(97) 現実にいくつかのプロジェクトが始まりつつある。(日経)

(98) 学生時代に反体制運動の洗礼を受けながらも，企業社会にどっぷりと漬かってきた男たちが，今，価値観の転換を図りつつある。(日経)

これらの複数主体を１つの集合体ととらえた場合は，文の表す動作もやはり１つのものと解釈され，時間の流れにそった複数の変化のくりかえしという意味あいはない。その場合，(95)，(96)，(97) は，限界動詞であるので《変化の不完結》を表すと解釈され，(98) は非限界動詞であるので，《動きの開始局面の不完結》を表すと解釈される。

６．シツツアルの一般的意味

以上，シツツアルの形式を，動詞の語彙的な意味タイプと関連させながら意味を考え，その根底にある一般的意味はどういうものかを検討してきた。再度まとめると，シツツアルは次のような意味を表すといえる。

Ⅰ．基本的意味

①変化の不完結

限界動詞（外的限界をもつ非限界動詞も含む）であれば，その動詞の表す変化の不完結な進行過程を表す。

②動きの開始局面の不完結

非限界動詞であれば，外的限界が与えられない限り，動きの始まりの瞬間の不完結な進行過程を表す。

Ⅱ．派生的意味

③くりかえし

限界動詞，非限界動詞に限らず，変化するものが複数であれば，動詞の表す動作のくりか

えしの不完結な進行過程を表す。

ここから１つの結論が導きだせる。シツツアルは，いずれも，変化の局面をとりたてているということである。限界動詞はもとより，非限界動詞であっても，限界を唯一意識できる局面である動きの始まりの局面をとらえている。このように，シツツアルは，持続的変化の場合はその変化の過程をとりたて，瞬間的変化の場合，あるいは，動きの場合は，変化の過程を強制的に付与することによって，常に，変化の局面をとりたてるのである。

その派生的意味としての《くりかえし》も，個々の一連の動作を巨視的に１つの変化ととらえている。変化するものが複数であることが条件で，変化するものの数＝個々の変化の数，ということになり，量的に限界づけられた変化となる。それゆえ，シツツアルの反復は，具体・特定的なリアルなものとして，シテイル形式のように習慣，あるいは恒常的な特性の意へと発展することはない。以上のことを，図示することでよりはっきりさせよう。

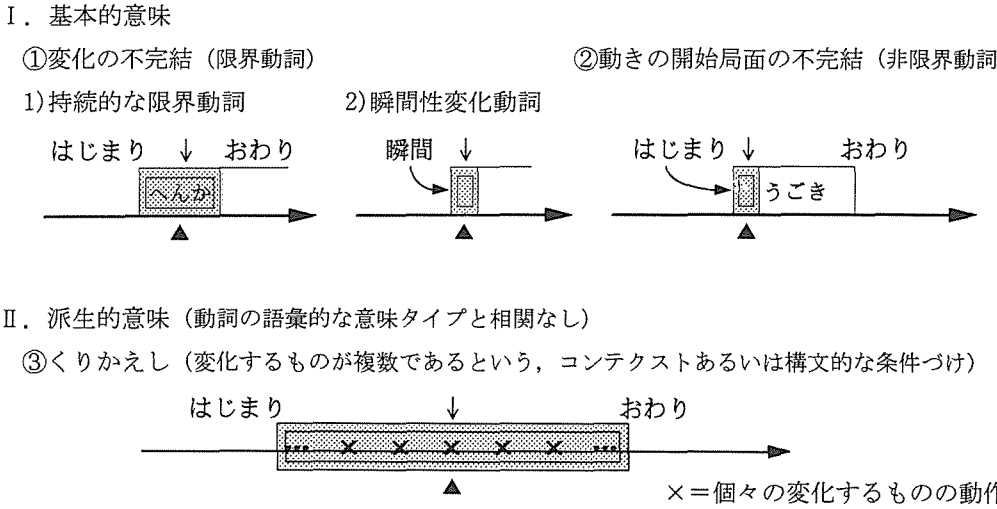

図１　シツツアルのさしだす姿（回＝変化の局面，▲＝基準時）

変化というものは，ある状態から別の状態へ変わることを意味し，本質的に，漸次的に進展する過程をもつものである。そうした，変化の局面をとりたて，その不完結を表すシツツアルは，推移過程に注目する形式であるともいえる。それゆえ，シツツアルは，動作の単純な継続の意だけでなく，推移的ニュアンスをも形式自体に含意しているし，その推移性ゆえに，一定不変の状態を表す動詞と共起可能な，「一時間（も）」，「しばらく（の間）」，「何時間も」等の期間を表す時間の状況語とは共起しない。

こうして，シツツアルの形式の一般的意味は，〈動詞の表す変化が，限界にむかって推移的に進行している状態〉を示す，《不完結性》の表現形式であり，不完結相と規定できるのである。

7．結

本稿では，現代日本語動詞のシツツアルの形式の一般的意味をめぐって考察を行ってきた。その結果，この形式は，基本的に，限界動詞のタイプであれば《変化の不完結》を表現し，非限界動詞のタイプであれば《動きの開始局面の不完結》を表現するが，いずれにしても，動詞の表す動作の変化の局面をとりたて，その変化の《不完結性》を表現するという意味的特徴を共通特徴としていることがわかった。

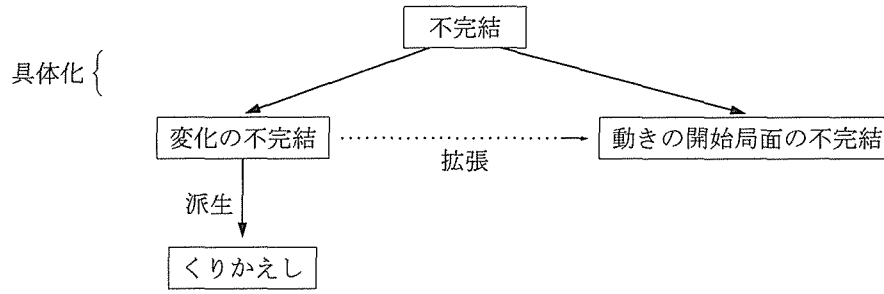

図２　シツツアルの表す意味の連関

一般的意味《不完結性》は，言い換えれば，変化の進行過程をさしだすということであり，実際の言語場面において具体化される際には，変化的側面をその語彙的な意味素性に含みこんでいる限界動詞において実現される《変化の不完結》が典型であって，非限界動詞の《動きの開始局面の不完結》は，動きの開始局面を変化としてとりあげるという手続きを踏んでの，《変化の不完結》が拡張された意味だとみなすことができる。また，《くりかえし》は，こうした動詞のもちまえのアスペクチュアリティーとは無関係に，変化するものが複数であるという文脈依存的な条件によって生じる意であることから，派生的な意味である。

シツツアルが不完結相であることは，シテイルとの対比によって，より一層明確にされる。シテイルは基本的には，限界動詞であれば《変化の結果の継続》を表し，非限界動詞であれば《動きの継続》を表すといわれており，後者の意は，動詞の表す動作の始まりと終わりの間の過程の姿をさしだしていて，シツツアルとともに，《不完結性》として同一カテゴリーに属するといえるかどうかが問題となる。シテイルの基本的意味を時間軸上に図示すると以下のようになる。

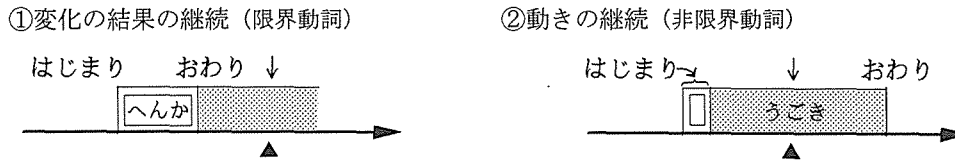

図３　シテイルのさしだす姿

既述したように，限界動詞における限界とは，状況の成立点のことであり，非限界動詞で状況の成立点に相当するのは動作の開始点である。そして，非限界動詞のシテイルの《動きの継続》の意は動きの開始局面後の状態であり，シツツアルが《動きの開始局面の不完結》を表すのとは事情が異なるのである。つまり，シテイルは，限界未達成の状態を示す《不完結性》というよりも，むしろ，限界達成後の状態，すなわち〈動詞の表す変化の結果生じた状態〉を示す《結果性》を表す形式と考えるべきである。こうして，両形の一般的意味をまとめ直せば，動詞の表す，動作と結びついた状態のうち，不完結の姿はシツツアルが表し，他方，結果の姿はシテイルが表しており，相補的なものとして認めることができる。両形は，日本語のアスペクトという１つの文法カテゴリーの中で，このように整然とした体系を成すわけである。したがって，日本語の完結－不完結の対立は，スル（非継続相）－シテイル（結果相）ではなく，スル（非継続相）－シツツアル（不完結相）であるといえるのである。

注

1　ここであげたシテイルとシツツアルとの類似点は，そのままシテアル（シテアッタ）にもあてはまり，日本語のアスペクト体系は，スル，シツツアル，シテイル，シテアルの４項が，パラディグマティックな対立関係としてあるのではないかと私は考えているが，そのことに関しては稿を改めて論じたい。

2　高橋(1985:9)は，シツツアルを「動作が運動の局面のなかにあるすがたをあらわす文法的くみあわせ動詞であり，その実現する意味の観点から，継続相のアスペクト動詞だということができる。」とし，そこに《継続性》を認めている。

3　奥田(1977)は，主体の動作か主体の変化かという意味特徴によって動詞を分類し，前者を動作動詞，後者を変化動詞と呼んでいる。本稿では，変化は限界を内包し，動作は限界を内包しないという観点から，変化動詞を限界動詞，動作動詞を非限界動詞と呼ぶことにしたい。

4　ここでいう限界的：非限界的の用語は，Холодович (1963) に基づいており，Comrie (1976) や Dahl (1981) を始め一般的に用いられる telic：atelic にほぼ等しい。

5　ある出来事を時間的観点から言語化するという作業においては，３つの時点を設定することができる。出来事自体が起こった時点，その出来事をとらえている時点，それから，その出来事について発話する時点。それぞれ，出来事時，基準時，発話時と名付けるなら，出来事を基準時においてどのようにとらえるか，というのがアスペクトのカテゴリーである。

6　所有権が対象から主体に移る場合，対象はカラ格の名詞で表されるのが普通であるが，このように，違う方法で表示される場合もある。

7　意味的に感情を表す動詞でも，「しる」，「きづく」，「おぼえる」等のように，動詞の表している心的活動が限界ある，主体の心的状態の変化であるものは，「しりつつある」，「きづきつつある」，「おぼえつつある」が主体の心的状態の変化が進行していることを表しており，シツツアル形式で《変化の不完結》を表す。

（ｉ）この年長の医師，重藤文夫医師が，若い歯科医よりもなお重い絶望感にとらえられる可能性があったはずであるのは，若い歯科医師が予感し，漠然と恐怖したところのものを博士は，現実にそして<u>しだいに</u>確実に<u>知りつつあった</u>からである。（広島）

参考文献

天野 みどり (1987)「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151 (須賀一好・早津恵美子編1995『動詞の自他』151-165 (ひつじ書房) に再録)

奥田 靖雄 (1977)「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」, 奥田(1985) 85-104

———— (1978)「アスペクトの研究をめぐって」, 奥田(1985) 105-143

———— (1985)『ことばの研究・序説』むぎ書房

———— (1988)「時間の表現」『教育国語』94, 2-17; 95, 28-41

金子 亨 (1995)『言語の時間表現』ひつじ書房

金田一 春彦 (1955)「日本語動詞のテンスとアスペクト」, 金田一編(1976), 27-61

———— (編) (1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

工藤 真由美 (1982)「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4, 50-88

———— (1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房

城田 俊 (1998)『日本語形態論』ひつじ書房

鈴木 重幸 (1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房

副島 健作 (1997)「現代日本語の客体結果相とヴォイス」『比較社会文化研究』1, 35-44, 九州大学大学院比較社会文化研究科

高橋 純 (1996)「『～つつある』について」『日本語教育』89, 100-110

高橋 太郎 (1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版

寺村 秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

中村 英子 (1997)「動作動詞テイル形の『反復』について—『反復』の解釈が生まれる諸条件—」『日本語教育』93, 73-84

姫野 昌子 (1982)「つつある」, 日本語教育学会(編)『日本語教育事典』, 374, 大修館書店

森田 良行・松木 正恵 (1989)『日本語表現文型—用例中心・複合辞の意味と用法—』アルク

森山 卓郎 (1986)「日本語アスペクトの時定項分析」, 宮地裕(編)『論集日本語研究(一) 現代編』, 78-116, 明治書院

山田 小枝 (1984)『アスペクト論』三修社

Comrie, Bernard. (1976) *Aspect: an introduction to the study of verbal aspect and related problems.* (邦訳：山田小枝(訳) 1988『アスペクト』むぎ書房)

Dahl, Östen. (1981) On the definition of the telic-atelic (bounded-nonbounded) distinction. in Tedeschi, P. J. and Zaenen, A. (eds.) *Syntax and semantics* 14: *tense and aspect*. 79-90. New York: Academic Press.

Miyahara, Fumio. (1996) *Aspect as an English grammatical category: groundwork for the aspect theory.* Tokyo: Shohakusha Publishing Co., Ltd.

Маслов, Ю. С. (1978) 'К основаниям сопоставительной аспектологии'. (邦訳：菅野裕臣(訳) 1991「対照アスペクト論の原理によせて」『動詞アスペクトについて(Ⅱ)・学習院大学東洋文化研究所調査研究報告35』, 31-97)

————(1984) 'Об основных понятиях аспектологии'. (邦訳：菅野裕臣(訳) 1991「アスペクト論の基本概念について」『動詞アスペクトについて(Ⅱ)・学習院大学東洋文化研究所調査研究報告35』, 98-139.)

Холодович, А. А. (1963) 'О предельных и непредельных глаголах (по данным корейского и японского языков).' (邦訳：菅野裕臣 (訳) 1990「限界動詞と非限界動詞について (朝鮮語と日本語

の資料による)」『動詞アスペクトについて（Ⅰ）・学習院大学東洋文化研究所調査研究報告29』，83-90)

用例出典

（毛時）古川薫『毛利元就とその時代』／（一局）川口俊彦『一局の将棋一回の人生』／（将棋）川口俊彦『将棋界奇々怪々』／（楡家）北杜夫『楡家の人びと』／（聖少）倉橋由美子『聖少女』／（銀鉄）宮沢賢治『銀河鉄道の夜』／（それ）夏目漱石『それから』／（孤高）新田次郎『孤高の人』／（広島）大江健三郎『広島ノート』／（沖縄）大江健三郎『沖縄ノート』／（野火）大岡昇平『野火』／（歳月）司馬遼太郎『歳月』／（国盗）司馬遼太郎『国盗り物語』／（毛利）山岡荘八『毛利元就』／（日経）『日本経済新聞』／（読売）『読売新聞』

（投稿受理日：1998年1月19日）

副島　健作（そえじま　けんさく）
九州大学大学院比較社会文化研究科博士後期課程
810-0044　福岡市中央区六本松４丁目2-1

Japanese Linguistics 4 (October, 1998) 31-52 [Article]

Imperfective aspect in present-day Japanese: a description of the meaning of the *shitsutsu-aru* form

SOEJIMA Kensaku
Graduate School, Kyushu University

Keywords

aspect, general meaning, inherent aspectuality, telic verb and atelic verb, imperfectivity

Abstract

The *shitsutsu-aru* form in Japanese has been regarded as a form for expressing a state of 'progression' of an action. However, no satisfactory answers have been given to the questions: (i) what specific meanings it expresses in actual usage, and (ii) what is its 'general meaning' as the sum total of those specific meanings. The purpose of this paper, then, is to provide a satisfactory answer to these problems.

The *shitsutsu-aru* form has two main types of meaning, namely the 'imperfectivity of change' and the 'imperfectivity of the beginning of an activity'. This variance can be elucidated on the basis of the inherent aspectuality of the verb used in this form. With telic verbs, the form expresses the 'imperfectivity of change.' With atelic verbs, it expresses the 'imperfectivity of the beginning of an activity.'

Atelic verbs mark telic situations when a terminal point is implied by syntactic or contextual features, and in this case they mean the 'imperfectivity of change' when combined with the *shitsutsu-aru* form. Telic verbs, on the other hand, cannot mean the 'imperfectivity of the beginning of an activity.' Therefore, the 'imperfectivity of change' is the prototypical meaning, from which the 'imperfectivity of the beginning of an activity' is extended.

The *shitsutsu-aru* form can sometimes have an 'iterative' meaning as a subsidiary meaning when plural subjects of change are implied by the syntax or the context.

All these variant meanings are ultimately derived from the general meaning of 'imperfectivity', which describes a state in which the change expressed by the verb is progressing toward its terminal point.

Furthermore, the opposition between the *shitsutsu-aru* form and the *shite-iru* form is equivalent to that between imperfective and resultative, and this fact indicates that the *shitsutsu-aru* form can be regarded as a form of 'imperfective aspect' in Japanese.